

山沢栄子 私の現代

2019/11/11

Eiko Yamazawa: What I Am Doing

2019年11月12日（火）—2020年1月26日（日）



東京都写真美術館は、生誕120年を迎える女性写真家のパイオニア、山沢栄子の大規模回顧展を開催します。山沢栄子は1899年大阪生まれ、1920年代のアメリカで写真を学び、1930年代から半世紀以上にわたり、日本における女性写真家の草分けとして活躍しました。当初はポートレートの撮影を主な仕事としていましたが、晩年の1980年代には抽象絵画のような写真作品を制作する作家として知られていました。とりわけカラー写真による色鮮やかな作品群は、当時の日本では他に例を見ないものでした。本展では、1970-80年代に手がけたカラーとモノクロによる抽象写真シリーズ〈What I Am Doing〉を中心に、抽象表現の原点を示す1960年代の写真集、戦前の活動を伝えるポートレートや関連資料などを展示し、写真による造形の実験を重ねることで、独自の芸術表現に到達した作家の歩みを辿ります。また、本展では山沢作品に加えて、TOPコレクションから、アルフレッド・スティーグリッツやポール・ストランドらの作品も加えて紹介し、1920年代以降のアメリカ近代写真の状況と山沢への影響を探ります。

左《What I Am Doing No.9》1980（プリント1986）年/右《What I Am Doing No.24》1982
（プリント1986）年 ともに 銀色素漂白方式印画 大阪中之島美術館蔵

本展のみどころ

1. 生誕 120 年、山沢栄子の功績を振り返る

写真家・山沢栄子の生誕 120 年を記念し、美術館では約 25 年ぶりとなる大規模個展を開催します。本展は、現存する 1970-80 年代の代表作を中心に、山沢栄子の抽象表現の原点を示す 1960 年代の写真集、そして戦前の活動を伝えるポートレートや関連資料など、約 140 点を展示します。あわせて、山沢の写真表現に大きな影響を与えた 20 世紀前半のアメリカ写真を代表する作品を TOP コレクションからご紹介します。1930 年代から半世紀以上にわたり写真家として、独自の芸術表現を探求し続けた山沢栄子のあゆみを辿ります。

2. 鮮烈な色彩、構図のダイナミズム、カメラで描く抽象画

本展は、山沢の作家としての集大成ともいえる〈What I Am Doing〉から始まる、4 章で構成されます。写真家として対象の配置と角度、光の周り方など、写真による造形の実験を重ね続けた山沢は、「抽象 (アブストラクト) 写真」というスタイルに行き着きました。当時の日本では他に例を見ない色鮮やかなカラー写真として発表された本作は、野菜や果物、レンガや石、さらには、自身の過去の作品や写真機材など、身近な素材を作品のモチーフにして、彫刻家のように構築的な画面をつくりだしています。山沢の芸術家としての仕事の集大成とも言える本シリーズ〈What I Am Doing〉にご注目ください。

3. アメリカ近代写真を牽引した作家の名作も

山沢が渡米した 1920 年代アメリカは「狂騒の 20 年代」と呼ばれ、アメリカ経済が繁栄し大衆消費社会の只中にありました。ジャズの流行や音楽、美術、文学などの文化が隆盛し、新たな価値観が次々に生み出されるなかで、写真家たちは、新しい写真のあり方を模索していました。アルフレッド・スティーグリッツ、ポール・ストランドらを筆頭に、絵画の方法論を模倣することで、芸術的な価値を高めようとする、これまでの方法ではなく、カメラ機能やレンズの特性を生かして写真でしか表すことができない視覚表現を目指したのです。そのような機運の洗礼を受け、山沢は写真家として生きる決意を固めました。本展では、ドキュメンタリー、ファッション、広告、雑誌などにも影響を与え、今日の写真表現へとつながる転換点となった、「アメリカ近代写真」の潮流を牽引した作家たちの TOP コレクションによる名作選を紹介します。

出品予定作家 (第 3 章 山沢栄子とアメリカ)

アルフレッド・スティーグリッツ、ポール・ストランド、アンセル・アダムス、エドワード・ウェストン、イモジェン・カニンガム、ラルフ・スタイナー、セシル・ビートン、ジョン・ローリングス、ポール・アウターブリッジ・ジュニア

4. 山沢栄子の挑戦と創造の軌跡

学生時代、思想家の平塚らいてうの活動に共鳴した山沢は、女性の生き方について強い関心を持ちました。27歳で単身渡米した留学先で、写真家コンスエロ・カナガと出会い、彼女の写真への態度や、女性が自立をして生きる姿に学んだ山沢は、写真家になることを決心しました。帰国後、山沢は故郷・大阪にスタジオを開き、アメリカ仕込みの高い技術と洗練されたポートレート写真が財界人や文化人の間で評判を呼び、商業写真家として成功を収めます。

その後、約30年間営んだスタジオを閉じ、自身の制作活動に集中していきます。晩年は車椅子の生活を送りながらも創作の手を止めることなく、数々の個展やグループ展に参加し、生涯第一線で活躍し続けました。

明治から平成まで激動の時代を、性別や年齢にとらわれることなく、「いつもでも自分自身をはっきりと持って」あゆみ続けた山沢栄子の生きかたは、見るものを力強く励ましてくれることでしょう。

「時代がやっと、私についてきたかな。ついてこなくてもかまわないけれど」

(朝日新聞 夕刊 1992年9月12日より一部抜粋)

「*Always keep myself.* いつでも自分自身をはっきりと持っている、ということね。」

(NHK 大阪「レンズが見た夢と美と～88歳 写真家 山沢栄子の世界～」1987年12月2日放送回より)

「女が独立で商売をやるなんてパトロンでもなければね、其他何々…とにかくあぶない人だと私は人におもはれた。しかしそれは私の子供時代からの夢だった。私の長い準備時代も過ぎた、今どうしても自分はやりたい。ただその一念だった。反対を受けた時人間は強くなるものだ。私は無茶に勇気が出てきて、やろう！出来るか出来ないかわからないことをやった。 ——中略——

ここに痛快なことが一つある。写真は技術の仕事だから男子と同等である事である。

あらゆることに於いて女性は男性よりもその価値如何にかかはらず収入をすくなくしてゐる現代の社会にあつて、女性なるが故に写真代を安くする必要の更がないのを私は愉快に思ふ。」

(山沢栄子寄稿『輝ク』「写真工房から」2年12月号、通巻21号、1934年12月17日1頁より 一部抜粋)

展示構成と主な出品作品

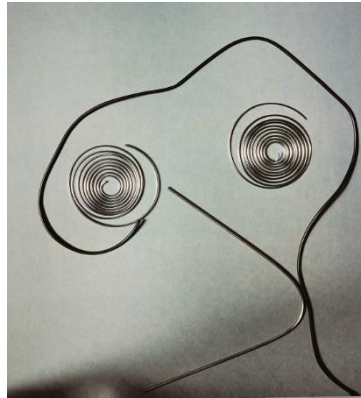
第1章 私の現代 What I Am Doing

本展は山沢の芸術家としての仕事の集大成とも言える、大阪中之島美術館所蔵の〈What I Am Doing〉シリーズ 28 点からはじまります。これらのプリントは、1986 年、山沢栄子の写真作家としての最後の新作個展に出品されたものです。1976 年以降の作品から 7 点を自選し、新作と合わせてシリーズにしています。長辺が最大で 1m を超え、フレームも特注で作られました。

また近年の研究により、〈What I Am Doing〉には、自身の過去の作品や写真機材を写し込んだ、きわめてコンセプチュアルな表現も含まれていることが明らかになってきました。日本における女性写真家の草分けとして、1930 年代から半世紀以上にわたり活躍した山沢のカメラは、最後にどのようなビジョンを写し出したのでしょうか。



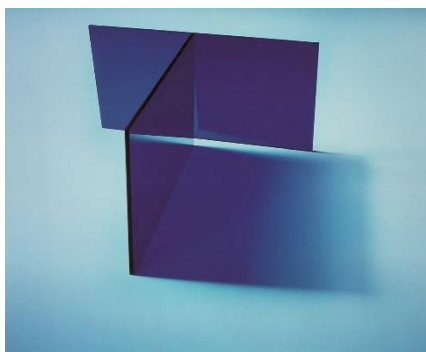
1-1



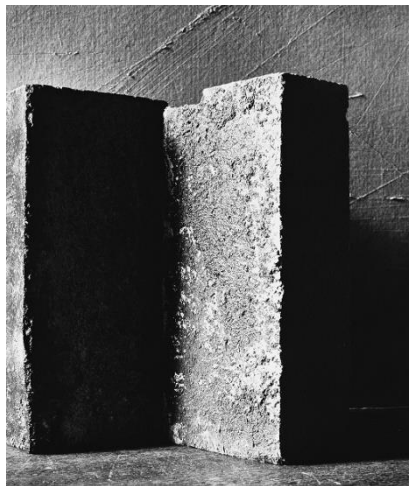
1-2



1-3



1-4



1-5

1-1 《What I Am Doing No. 9》

1-2 《What I Am Doing No. 72》

1-3 《What I Am Doing No. 77》

1-4 《What I Am Doing No. 70》

すべて 1980（プリント 1986）年

銀色素漂白方式印画（チバクローム）

大阪中之島美術館蔵

1-5 《What I Am Doing No. 62》

1980（プリント 1986）年 ゼラチン・シ

ルバー・プリント 大阪中之島美術館蔵

写実による表現は、あとかたもなく過ぎ去ってしまった。音のように、空気のように、その方法は抽象的な方向をたどって、私の精神をうごかす。私の造形の行きつくところは未だ確定しないが、それにしても何という鮮明な現実なのだろう。光線の変化で新しい色彩とフォルムが生まれてゆくを見る。

人間は感じることに、考えることによって、真理への渴望にひきつけられる。私の現代はその刻印だろうか。

（山沢栄子『私の現代』山沢写真研究所、1976 年より）

第2章 遠近 Far and Near

山沢栄子が1962年に出版した写真集『遠近』を紹介します。本書には、1943年から1962年の間に制作された作品77点が収録され、すでにカラーや抽象写真も含まれています。そのほとんどはプリントやフィルムが現存していないため、この写真集自体が山沢の抽象表現の原点を示す重要な資料と言えます。

『遠近』は、「ニューヨーク6カ月の目」という見出しから始まっています。これは山沢が戦後に再渡米した出来事を指しています。山沢は1920年代のアメリカで写真を学び、帰国後にポートレート写真家となりましたが、長らく自分の作品をつくる時間はありませんでした。1955年、写真の師であるコンスエロ・カナガに招かれ、ニューヨークに半年間滞在した山沢は、自らの写真の方向性を確かめるように写真から抽象へと向かっていきます。そのプロセスは、写真家から芸術家に軸足を移していく道筋とも重なって見えます。



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6

2-1 《レキシントンアヴェニュー》1955年／2-2 《仔犬》1958年／2-3 《新聞配達の少年》1960年／2-4 《歩く老婦人》1955年／2-5 《自然の造型》1955年 すべて 写真集『遠近』より グラビア印刷
2-6 《静物 机、皿、りんご》1961年 写真集『遠近』より オフセット印刷

第3章 山沢栄子とアメリカ Eiko Yamazawa and America

本章は「コンスエロ・カナガと『カメラ・ワーク』」「西海岸の写真家たち」「アメリカの広告写真」の3部にわけて、20世紀前半のアメリカ写真を紹介します。

山沢栄子は1926年から1927年にかけて、サンフランシスコのコンスエロ・カナガのもとで写真を学びました。5歳年上の師、カナガはアルフレッド・スティーグリッツに私淑する若き写真家でした。その頃からのカナガの友人には、同じ西海岸を拠点とするエドワード・ウェストンやイモジェン・カニンガムがいます。彼らは早くから抽象的な写真表現を志向したことで知られています。また山沢は1929年に帰国する前、ファッション雑誌『ハーパーズ・バザー』の写真家ニコラス・マーレイのもとでも働きました。ここで広告写真の仕事に触れた山沢は、戦後自身も商業写真のビジネスを始めます。当初画学生として海を渡った山沢は、アメリカでどのような写真文化の中に身を置いたのでしょうか。



3

《コンスエロ・カナガ女史(写真家)》1955年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

第4章 「写真家」山沢栄子 Eiko Yamazawa the Photographer

最終章では、〈What I Am Doing〉や『遠近』以前の、山沢栄子の「写真家」としての仕事を「ポートレート」「疎開中の写真」「商業写真」の3部にわけて紹介します。

山沢栄子は1931年、大阪のビジネス街に写真スタジオを開きます。主な仕事はポートレートの撮影でした。大阪の財界人からその技術を認められた山沢は、次第に東京の文化人へと顧客の幅を広げていきます。当時の作品の多くは戦災で失われましたが、俳優の山本安英らを写したポートレートは人の内面を写し出す優れた表現力を見せています。一方、戦時中に山沢が疎開していた信州に伝わる作品群は、おそらく帰国後に初めて手がけたクライアントのない写真です。敗戦直前の逼迫した時期であるにもかかわらず、たくましく穏やかに生活を営む人々の姿を山沢のカメラはとらえています。戦後に始めた商業写真も、山沢の仕事の幅の広さと抽象表現への接近を示す貴重な資料です。



4-1



4-2



4-3

4-1 《山本安英“土”》1943 (プリント1990)年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 / 4-2、4-3 《疎開中の写真》1945年 ゼラチン・シルバー・プリント 個人蔵

出品作品数

140点（そのほか関連資料 約10点）

作家略年譜

山沢栄子（1899-1995）



山沢栄子 1950年代 撮影：浜地和子

- 1899 大阪に生まれる
- 1918 私立女子美術学校日本画科選科卒業
- 1926 渡米
カリフォルニア・スクール・オブ・ファインアーツで油絵を学ぶ
アメリカ人写真家コンスエロ・カナガの助手となる
- 1929 帰国
「第3回国際写真サロン」東京朝日新聞社
- 1931 大阪に写真スタジオを開設
- 1945 戦災でスタジオ焼失
- 1950 山沢写真研究会設立
- 1952 商業写真山沢スタジオ開設
- 1955 渡米、ニューヨークに半年間滞在
大阪府芸術賞受賞
- 1962 写真集『遠近』出版
- 1968 神戸にスタジオ移転
- 1976 個展「アブストラクト」ロックペイントフロアー（大阪）
個展「私の現代」新宿ニコンサロン（東京）
- 1977 日本写真協会功労賞
- 1980 神戸市文化賞
- 1983 個展「山沢栄子アブストラクト写真展」大阪府立現代美術センター
- 1986 個展「私の現代3」有楽町朝日ギャラリー（東京）／大阪に巡回
ソロプチミスト賞受賞
- 1994 個展「山沢栄子展」伊丹市立美術館
- 1995 死去（享年96）

パブリックコレクション

東京都写真美術館／中央区立郷土天文館／富士フィルム株式会社／川崎市市民ミュージアム／
大阪中之島美術館／伊丹市立美術館

関連イベント

講演会

物が少ない作家——山沢栄子の写真とアメリカ

2019年11月23日(土・祝) 14:00-15:30

講師：池上司（西宮市大谷記念美術館学芸員）

山沢栄子が出会ったアメリカ——女性、写真、創造する知覚

2019年12月1日(日) 14:00-15:30

講師：日高優（立教大学教授）

会場：1階スタジオ

定員：50名(番号順入場、自由席)

聴講無料 ※各日10:00より1階総合受付にて整理券を配布します。

ワークショップ

身近な素材であなたの世界をつくってみよう

2019年11月30日(土) 14:00-17:00

講師：うつゆみこ（写真家）

会場：1階スタジオ

対象：小学校4年生から一般

定員：20名（事前申込み制、応募多数の場合は抽選）

参加費：無料

*申込方法など詳細は当館ホームページでご確認ください。

ギャラリートーク

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク／手話通訳つきギャラリートーク

2019年11月15日、12月6日※、20日(金) 14:00-

2020年1月3日、17日(金) 14:00-

※12月6日(金)は手話通訳つきで行ないます。

本展チケット(当日有効)をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

Bunkamura ザ・ミュージアム×TOPMUSEUM 相互割引

「NY フォト割」

会期中、下記の美術展と相互にお得な割引サービスを実施します。Bunkamura ザ・ミュージアム（東京・渋谷）の「永遠のソール・ライター」展(2020年1月9日-3月8日)の入館券（半券・QRチケット可）をご提示いただくと、本展入場料が通常料金から2割引となります。また、Bunkamura ザ・ミュージアムで本展の入場券をご提示いただくと、対象の展覧会が当日料金から100円引きでご鑑賞いただけます。山沢栄子（1899-1995）と、ソール・ライター（1923-2013）、ふたりの写真家にとって写真制作の重要な舞台となった「ニューヨーク」をキーワードに、両展覧会をより深く、お得に味わえる「NY フォト割」を、どうぞご活用ください。

□ 割引対象展覧会

「ニューヨークが生んだ伝説の写真家 永遠のソール・ライター」

会場：Bunkamura ザ・ミュージアム

会期：2020年1月9日(木) - 3月8日(日)

開館時間：10:00-18:00(毎週金・土曜日は21:00まで)

※入館は閉館の30分前まで

休館日：2020年1月21日(火)、2月18日(火)のみ休館

問合せ：03-5777-8600(ハローダイヤル 8:00-22:00)

展覧会公式サイト：

https://www.bunkamura.co.jp/museum/exhibition/20_saulleiter/



※入場券1枚につき1回限り有効。他の割引併用不可。

※各展の会期中のみ適用

※Bunkamura ザ・ミュージアムのチケット販売窓口で「山沢栄子 私の現代」展の入場券をご提示ください。

※東京都写真美術館では2020年1月2日(木)、3日(金)が無料開館日、1月21日(火)の開館記念日(無料)のため発券を行いません。

展覧会図録



『山沢栄子 私の現代』価格：3,500円(税抜)

1970-80年代に手がけたカラーとモノクロによる抽象写真シリーズ<What I Am Doing>を中心に、抽象表現の原点を示す1960年代の写真集『遠近』を収載。また、戦前の活動を伝えるポートレートや、アメリカ近代写真との関連を示す資料、疎開中の写真など、158点の図版を収載した決定版。

発行：株式会社赤々舎、編集・執筆：池上司(西宮市大谷記念館学芸員)、鈴木佳子(東京都写真美術館学芸員)

開催概要 ※本展は西宮市大谷記念美術館との共同企画です。

展覧会名[和] 山沢栄子 私の現代

展覧会名[英] Eiko Yamazawa: What I Am Doing

開催期間：2019年11月12日（火）－2020年1月26日（日）

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

特別協力：大阪中之島美術館準備室、西宮市大谷記念美術館

会場：東京都写真美術館 3階展示室

休館日：毎週月曜日（ただし1月13日[月・祝]は開館し、1月14日[火]は休館。年末年始12月29日[日]から1月1日[水・祝]は休館）

開館時間：10:00－18:00（木・金は20:00まで。1月2日[木]と3日[金]の開館は18:00まで。）

料金：一般 700（560）円／学生 600（480）円／中高生・65歳以上 500（400）円

※（ ）は20名以上団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、各種カード会員割引、当館年間パスポートご提示者。小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料。第3水曜日は65歳以上無料。1月2日（木）と3日（金）は無料。1月21日（火）は開館記念日のため無料。 ※各種割引の併用はできません。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

- * 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
- * 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。
- * 図版3 《コンソエロ カネガ女史(写真家)》の表記は作品名の原文ママとしております。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 1-13-3 Mita, Meguro-ku,
153-0062, Tokyo, Japan Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp